

初年次必修科目「情報活用」授業運営モデルの組織的な開発と実施 Management Model of “Information Literacy” Developed Organizationally

近藤 伸彦 (Nobuhiko KONDO)

CELL 教育研究所 (CELL Institute for Educational Development)

本学では、初年次必修科目のひとつとして「情報活用」を統一カリキュラムに基づき複数クラス開講している。本科目は、大学での学びに必要な不可欠な IT スキルを習得させ、広く社会で要求される情報活用力を育成することを目的としている。2007 年度より設置された本科目の授業運営モデルは、科目コーディネーターを中心として担当教員や外部企業などと連携しつつ開発され、4 年間を通しブラッシュアップを繰り返しながら運営されてきた。検定の結果等から、4 年間の実践を通して一貫した科目コンセプトのまま少しずつよりよい学習成果へ結びついていったことがわかり、本運営モデルの一定の有用性が示された。

キーワード：情報活用力、初年次必修科目、授業運営モデル

1. はじめに

広く社会で要求される情報活用力の育成のため、大手前大学（以下、本学）では初年次必修科目「情報活用」を設定している（本田ほか 2009）。本科目では、多様化する学生に対してより高い教育効果を上げるための授業運営モデルの開発と本モデルに基づいた授業を実施してきた。本科目は統一カリキュラムに基づき複数クラスを同時展開してきた。全クラス共通の授業計画や毎回の課題の作成などは、科目としての学習目標にもとづいて科目コーディネーターを中心に行った。授業前後には担当教員による FD を行い、授業の報告や教育方法についての共有や議論、授業計画や教材のブラッシュアップを行った。「情報活用」のみならず初年次必修科目としての統一的な授業運営のため、出欠や課題提出状況は学習支援センターが一元管理した。

本稿では、2007 年度から 2010 年度にわたってこのように組織的に開発・運営してきた「情報活用」についての実践報告を行う。

2. 「情報活用」の授業概要

2.1. 「情報活用」の位置づけ

本学では 2007 年度の大学カリキュラム改編に際し、初年次必修科目として「フレッシュマンセミナー」「日本語表現」「英語表現」「情報活用」の 4 科目が設置された。初年次必修科目は単なる知識的・スキルの基

盤を固めるための科目群であるにとどまらず、リベラルアーツ型教育の基盤として、自ら目標設定・学習管理し主体的に学ぶ力や課題を発見し解決する力などを育成する、高校から大学への接続という役割を担う科目群である。「情報活用」はその中の 1 科目として、「情報活用力」を学ぶ科目として位置づけられている。

2.2. 授業計画の概要

2.2.1 統一カリキュラム

本学は Semester 制を採用しており、「情報活用」は初年次の春学期・秋学期にそれぞれ開講してきた。いずれも、一学年およそ 800～850 名の学生すべてに対して統一のカリキュラムでの授業運営を行った。

科目の目標設定、教材・課題の選定や作成などは科目コーディネーターが行い、科目担当の全教員への連絡など、全クラスで統一の授業が展開され同一の学習成果が得られるための調整を行った。

授業外の課題は毎回の授業で課し、締切までの提出を義務づけることで、自らが学習計画を立て、こつこつと成し遂げていく力を涵養することもねらった。

また、初年次必修 4 科目はさまざまな形で連携しながら授業を展開してきた。「情報活用」以外の初年次必修科目とも必要に応じて行った。「情報活用」は科目を超えて「全学生が PC を使用する時間」としての役割があり、Web ベースのアンケートや情報関連の資格の対策講座の案内など、適宜有効な活用が考えられた。

2.2.2 春学期の概要

春学期は、大学生として学びを深めるために必要不可欠なコンピュータスキル、IT スキルを身につけることを目標とし、入学時点においては相当なばらつきのあるスキルを一定水準まで揃えることを目指した。

具体的には、以下のような内容で構成される。

- ・ 学内ネットワークの利用方法
- ・ メールの利用方法
- ・ 文書作成ソフト(Microsoft Word)
- ・ 表計算ソフト(Microsoft Excel)
- ・ プレゼンテーションソフト(Microsoft PowerPoint)
- ・ タッチタイピング

教材としては、2007 年度は「繰り返して慣れる! スピードマスターOffice2003&情報モラル」、2008 年度以降は「繰り返して慣れる! スピードマスターOffice2007&情報モラル」および「日本語ワープロ技能標準試験過去問題集」を使用した(いずれも noa 出版)。

2.2.3 秋学期の概要

秋学期は、春学期に身につけた基礎スキルを社会で実践的に「活用」するための知識・能力(情報活用力)を身につけることをねらった学習内容を設定した。

具体的には、以下のような内容で構成される。

- ・ 情報検索、情報運用
- ・ 数値分析、データベース
- ・ ファイル・データ管理
- ・ インターネットコミュニケーション
- ・ 文書表現、ビジュアル表現
- ・ プレゼンテーション

プレゼンテーションは自ら選択あるいは与えられたテーマにもとづき、秋学期に学習したことを活かして情報検索、分析したものを PowerPoint のスライドにまとめ、3 分間で発表するという実習とした。

秋学期のテキストには「考える 伝える 分かちあう 情報活用力 (noa 出版)」を 4 年間採用した。また本テキストは、内容と連動した LMS「NEST」がセットになっており、学習内容の確認テストや課題提出、掲示板などの機能がある。さらに秋学期には、情報活用の基盤力「ICT 基礎知識」「論理力」「数理力」を育成する e ラーニング教材「Rasti-Learning」を課外学習として活用した。授業、課題および「Rasti-Learning」により情報活用力の向上を目指した。

2.3. 検定試験

2.3.1 検定試験の導入

明確な到達目標を自ら設定し、その達成に向けて学

習計画を立て遂行していくことや、ハードルを乗り越えることを体験してもらうことなどを目的として、全学生共通の検定試験を期末試験として導入した。「英語表現」「日本語表現」も同様のねらいにおいて検定試験をそれぞれ導入してきた。

2.3.2 春学期「日本語ワープロ技能標準試験」

春学期末には、学習内容のうち大きな割合を占める文書作成ソフトの基礎スキルとタッチタイピングの成果を測るために、NPO 法人 ICT 利活用力推進機構主催の「日本語ワープロ技能標準試験」を 2008 年度より採用した。試験日を自由に設定可能、授業内に実施可能、受験料が安価といったことが採用理由である。当試験は、定められたフォーマットで適切なビジネス文書が作成できるかを評価する「ビジネス文書科目」(20 分程度の試験時間)と、正確で素早い文字入力の評価する「入力科目」(10 分間)の 2 科目からなる。

2.3.3 秋学期「情報活用力診断テスト Rasti」

秋学期末の試験には、同機構の主催する情報活用力診断テスト「Rasti」を 2007 年度より採用した(NPO 法人 ICT 利活用力推進機構 2005)。「Rasti」は現実起こりうる ICT 利活用場面における判断力、問題解決能力を診断する Web ベーステストである。2010 年度からは IRT (項目応答理論) 方式が取り入れられた。

「Rasti」は秋学期末試験として受験するだけでなく、春学期第 1 回(2007 年度は秋学期の第 1 回)の授業においても受験し、1 年間(半年間)の「情報活用」の教育効果を点数の伸びにより測定することもねらった。

2.4. 到達目標別コース分け

高等教育のユニバーサル化は大学生の学習意欲や学力の多様化につながり(金子 2007)、これは情報教育においても例外ではない。高等学校までの情報教育の質の違いや、学校・自宅での PC 環境の違い、さらには学生本人の PC への関心の高さの違いなどにより、入学時点での情報リテラシーや IT スキル、および学習意欲はさまざまであり、統一の授業計画で多様な学生ひとりひとりに適切な学習を促すことが困難になってきた。

そこで、異なるレベルの到達目標を掲げ、授業の進度や課題の達成目標が異なる 3 つのコースを設け、学生自身が到達目標に従ってコースを選択するというシステムが考案され、2008 年度より実施された。学力などによりコースを割り当てるのではなく、学生自らが目標を設定し責任を持ってコースを選択するところが大きな特徴である。到達目標の達成は成績評価にも大きく関連する。コース名は成績の評定 A、B、C と対

表 1 コース別到達目標

学期	コース	到達目標
春学期	A	日本語ワープロ技能標準試験 2 級合格
	B	上記試験 3 級合格
	C	3 級合格を目指してスキルアップ
秋学期	A	Rasti 550 点 (社会人フレッシュマン目標点)
	B	Rasti 500 点
	C	Rasti 450 点

応し、所属コースの到達目標の達成の可否またはそれに準ずる学習成果により対応する成績評価を行った。

春学期・秋学期それぞれのコース別到達目標を表 1 に示す。到達目標は期末の検定試験に対応する。春学期は日本語ワープロ技能標準試験の合格級、秋学期は Rasti の得点とした。これにつながる小目標として、春学期はタイピングの打鍵数、秋学期は Rasti-Learning に用意されている小テストの点数にそれぞれ到達目標を設け、最終的な到達目標へ向けてのステップとした。

3. 「情報活用」の組織的な運営

3.1. 教員のミーティング

「情報活用」および他の必修 3 科目は、週 4 日、午前の 1、2 限に複数クラス同時開講してきた。「情報活用」は一学年およそ 800 名を計 24 クラスに分け、1 クラス 20~40 名程度でクラスを編成した。複数教員が統一カリキュラムに基づいて授業を行うにあたり、学習目標・授業内容の確認やその他の情報共有の必要があるため、毎回授業の前後 10~30 分程度を利用しその日の担当教員によるミーティングを行ってきた。授業前にはその回の授業内容の確認や、同一週の前曜日までの授業の報告などを行い、授業後には、その授業で行った授業方法の共有や、問題点の報告などを行った。

こうした授業前後のミーティングが日常的な FD の場としても機能し、柔軟に授業内容の改善なども行われた。とくに秋学期は、実質的な目標である Rasti の点数の伸長にとってはどのような授業内容や課題が効果的であるかを実践から探ることをねらった。2007 年度は教員個別の取り組みを年度末の FD において共有し、2008 年度・2009 年度はそれを踏まえて曜日ごとにミーティングで授業内容を決定していく形式をとった。2010 年度は 3 年間の実践をもとにコーディネーターが統一の授業計画と課題作成を行い、ミーティングではこれに関する意見交換を行った。

学期末には Web での学生アンケートを実施した。このアンケートは教員や授業への評価と学生自身の学習

状況に関する項目から構成される。これらのアンケート結果や、教員が授業において行っている工夫や気づきは、先述の日常的なミーティングや学期前後のミーティングなどで適宜共有し、「情報活用」全体としての教育力向上を目指した。

3.2. 学習支援センターとの連携と学習支援システム

本学では、学生の自己学習を支援するために学習支援センターを設置している。授業での習得が不十分だった点や、課題に取り組むうえで困難な点は、自習室に常駐しているチューターが支援することで、あらゆる学生への細やかな対応を目指した。

出欠状況は授業後のミーティングで各教員からコーディネーターへと伝達される。出欠状況、課題提出状況などの学習状況は、学習支援センターのスタッフによりデータベース化され、一元管理される。こうしたデータは、独自開発の LMS 「確認くん®」を通して学生・教員双方が確認できる環境を整えた。これは「情報活用」だけでなく他の初年次必修科目も同様であり、ひとつの科目のみならず複数の科目から学生の学習状況を把握することができる利点がある。

3.3. 教材・授業計画等の共同開発

教材は株式会社ワークアカデミーとの共同開発を行ってきた。授業運営していくうえで、教材の改善点などをコーディネーターが担当教員から収集するなど、実際の授業運営を通してのフィードバックにより教材のブラッシュアップを行う体制をとった。

3.4. 実践結果の検証

本授業モデルにもとづく授業の実践結果は、本学附置の CELL 教育研究所にて研究・分析した。本授業運営モデルにもとづき実施してきた授業の結果・実績をまとめ、大学内外へ報告・紹介することで本モデルの評価や改善につなげていくこととした。

4. 授業実践の結果

4.1. 日本語ワープロ技能標準試験

2008 年から 3 年間春学期に実施してきた日本語ワープロ技能標準試験の結果を表 2 に示す。3 級は全学生が受験、2 級は任意受験とした。表 1 のようにコース目標を設定しているため、A コースの学生はほぼ 2 級を受験した。合格率は全体として年々向上していったことがわかる。入学時点での学生の平均的スキルが年々上がっていることもあるが、指導上のノウハウが蓄積され的確な指導ができるようになっていったことも要因のひとつとして考えられる。

4.2. Rasti

4年間のRastiの結果を表3および表4に示す。「授業前」は、2007年度が秋学期第1回授業、2008年度以降が春学期第1回授業における受験結果である。「授業後」は秋学期末の受験結果である。「伸び」は「授業前」から「授業後」の点数の伸びの平均である。2008年度以降はA～Cのコース別の平均点も記載している。

年を追うごとに、平均点そのものも点数の伸びも向上している傾向にある。ただし、2010年度はテストの方式が変更されたことから単純な比較はできないことを付記しておく。

表2 日本語ワープロ技能標準試験合格率
(カッコ内は合格者数)

学期	コース	3級	2級
2008	A	99.3% (145名)	91.3% (115名)
	B	92.2% (439名)	83.5% (71名)
	C	41.1% (62名)	受験者なし
	計	83.6% (646名) 受験者数 773名	88.2% (186名) 受験者数 221名
2009	A	100.0% (171名)	97.2% (140名)
	B	94.8% (385名)	93.6% (44名)
	C	56.8% (92名)	100.0% (4名)
	計	87.7% (648名) 受験者数 739名	96.4% (188名) 受験者数 195名
2010	A	98.7% (231名)	97.5% (196名)
	B	93.6% (380名)	87.3% (48名)
	C	71.7% (76名)	受験者なし
	計	92.1% (687名) 受験者数 746名	95.3% (244名) 受験者数 256名

表3 Rasti 2007年度・2008年度の結果

	2007	2008			
		平均	A	B	C
授業前	400.5	416.4	481.1	401.5	367.2
授業後	458.2	486.3	561.1	470.2	425.1
伸び	57.7	69.9	80.0	68.7	57.9

表4 Rasti 2009年度・2010年度の結果

	2009				2010			
	平均	A	B	C	平均	A	B	C
授業前	386.5	449.6	379.0	330.9	424.2	490.8	400.2	360.0
授業後	474.3	540.3	464.9	420.2	509.6	574.5	491.4	418.4
伸び	87.8	90.7	85.9	89.4	84.7	82.3	92.0	61.3

5. おわりに

本学の初年次必修科目「情報活用」は共通のねらいをもった必修4科目のひとつであり、統一の授業計画と教材、検定試験、授業前後のミーティングやFDなどを含む授業運営モデルをもとに組織的な運営がなされてきた。科目としての大きな目標は不変のまま、4年間の実践を通して少しずつよりよい学習成果へ結びつき、本授業運営モデルの一定の有用性が示唆された。4年間の実践をさらに検証し、今後の「情報活用」へと継承していきたい。

謝辞

本稿は大手前大学初年次必修科目の取り組みをまとめたものである。本取り組みは学内外の多くの方々との協働により行われたものである。本取り組みに携わったすべての方々に謝意を表します。

参考文献

- 新垣円, 本田直也, 近藤伸彦 (2010) 情報活用能力育成に繋がる授業運営要因の分析. 『教育システム情報学会第35回全国大会講演論文集』, 451-452.
- 本田直也, 近藤伸彦, 吉川聡 (2009) 大学の初年次必修情報科目におけるICT活用力の育成. 『2009PCカンファレンス論文集』, 265-268.
- 金子元久 (2007) 『大学の教育力』, ちくま新書, 東京.
- NPO法人ICT利活用力推進機構 (2005) 情報活用力診断テスト Rasti. <http://rasti.jp/> (参照日 2010.3.31).

SUMMARY

Otemae University has the first year compulsory subject "Information literacy" based on the unified curriculum. The subject has the goals; acquirement of the IT skills for the study in the university, and of the information literacy which is necessary as a member of the society. The management model of the subject had been developed and operated organizationally by the coordinator, teachers, and the external company during these four years. In this paper, the model is considered based on the results of the operation.

KEYWORDS: INFORMATION LITERACY, FIRST-YEAR EXPERIENCE, MANAGEMENT MODEL OF SUBJECT